

春原 史寛（武蔵野美術大学）

1970 年の大阪万博には表現に関わる専門家が動員された。会場計画やパビリオン設計を担った建築家たち、ポスターやシンボルマーク、展示空間などを手がけたデザイナーたち。そして、多くの美術家たちも、例えば、伊サムノグチ、宇佐美圭司、草間彌生、高松次郎、田中信太郎、堂本尚郎、中谷芙二子、三木富雄、山口勝弘、ヨシダミノルらが、作品発表、展示・造形構成などの様々な立場・文脈で参加した。また、万国博美術展や日本民芸館は伝統的な美術工芸に触れられる場であった。主催側が設定したメインテーマの「人類の進歩と調和」を展開する 4 つのサブテーマの一つが「より深い相互の理解を」で、「知的な諸制度」に對をなすものとしての「情的な諸芸術」の大きな役割が想定された。

万博の外側では、現代美術の文脈でインターメディアや環境芸術といった概念が追究され、東野芳明による「現代美術の一断面」展（東京国立近代美術館）や、中原佑介による東京ビエンナーレ「人間と物質」展が開催され、もの派周辺の先鋭的な表現が注目されていた。対象的な現象として、岡本太郎が総合ディレクターを務めた、《太陽の塔》を中心としたテーマ館の準備に加わった小松左京は、万博の準備側において『最新、最高、最先端』と考えられたものの発想の基盤が、都市中間層の文化にあり、一方、観客の大部分は地方民衆であって、この間にはっきりと断層が見てとられた」と振り返っている。つまり、想定を超え、あらゆる属性や関心の人々が、現代から古典まで他種多様な「美術」と従来にない規模で出会う場が、万博の内側だった。

しかしながら、批評家たちが盛んに万博のあり方を論じ、建築雑誌・デザイン雑誌が、万博の建築・デザインの展開を大きく取り上げるなか、多くの美術雑誌は、強い関心を抱かない態度を貫き通したことは、建築・デザインと美術が担う社会的役割の違いを端的に示した。このような大阪万博の美術は、当時の日本の美術をめぐる状況の総体をも逆照射する。美術家たちが、万博の内外で、どのような契機と思考によっていかなる実践を展開し、どのように受け取られたのかを検討する。